

## 【導入 命令の形式】

「前の方に座ってください」と黒板に書かれた。後ろに座っている人が一番前に来ることはなく、全体が前方にスライドする。間が詰まる。前回の指示は「後ろに座ることの禁止」だった。この二つは指示する内容 **reference** は同一だが、意味 **meaning** は異なる。

このように命令の形式には 2 つのものがある。

- 1) **prescribe** 指示
- 2) **prohibit** 禁止

どちらの命令がより有効に統制できるか、ひっくり返せばどちらが従いやすいかは社会的に検討されている。校則の作り方や、医者にかかった時の薬の飲み方や生活習慣の改善など、活用の場面は多い。また、外交の場面において命令は禁止の形式を取る<sup>1</sup>らしい。

## 【1.歴史は変わる】

Harvey Milk の話から引き続いている「Don't ask, Don't tell」policy について。これも禁止の形式を持つ命令ですね。関係してオバマ氏が演説した「All the American servicemen and women, who are willing to risk their lives for their country, must be treated fairly and equally.」の話。変えようとする者への援助を訴えることには、変革の難しさが前提にある。変えることが難しいことは、さらに言えば難しくとも変わるものという含意がある。社会の持つ**抗変化性**は、変わりにくさと変わることの両方を意味する。

タイトル「歴史は変わる」が意味するのは教科書問題などで言われる「解釈」の問題ではなく、慣習などは変わっていく、つまり社会が変わるところだろう。

## 【2.「社会」という場の性質】

ではその「社会」というのはどのようなものだろうか。どのように記述・分析可能だろうか？

社会を分析するとはどういうことか？

社会を相互行為のシステムと捉える。社会には相互作用の場に働く力がある。

力学のメタファーから説明しよう。力学では、「力」は観察できない。しかし力を加えられた結果起きる「現象」は観察可能。その観察可能な現象から、そこに働いている「関係性」を導き出す。その関係性が「法則」、つまり働く「力」であり、その法則を導き出すのが「力学」という学問だろう。

---

<sup>1</sup>他の国に「～しなさい」と言うことは内政干渉で、「(その国だけでなくすべての国が)～してはいけない」なら可能だろうか。この違いは何に由来するのだろうか。「(あなたの国は～のルールに従っていて、それに基づくと)～してはいけない(ことになっている)」のかもしれない。

社会において観察可能なものは人の「行為」である。その行為を「観察する」だけ、「観察するということを観察する」、「観察を観察することをさらに観察する」、……と「観察と記述」をメタ的に繰り返すのではない。観察された行為の法則性、つまり社会に働く力<sup>2</sup>を見つげ出す作法の体系が社会学である。

#### デュルケームの自殺論

次回（今週）からデュルケームの自殺論を扱う。デュルケームの主張はシンプルで、一言で表すなら「社会は存在する」だろう。彼の生きた時代には社会学という学問体系は成立していない。その中で彼は「社会をものとして扱う」ことを主張し、「社会学」の成立を訴えた<sup>3</sup>。「社会は存在する。故に社会学は存在する！！」。

自殺論はそのモノグラフで、

「ものの観察（自殺の数とその変化）」から「社会という場の性質（社会的法則性）」を分析した。

社会学の古典だが、近年は理論の危うさなど批判もあるとのこと。

### 【3.「変化」はどこからくるか？】

変化という観点から社会を捉えると、社会のあり方について「機能主義-葛藤理論」の議論がまた出てくる。結論を先取りしておく。機能主義は「変化は社会の外部からもたらされる」とする外生説をとり、葛藤理論は「社会とは定義的に矛盾・対立を内にはらんでい、つまり社会は定義的に変化するものである」という内生説をとる。

#### 境界維持

変化する個の外と内を分ける境界線はどのようなものだろうか。内部をどのように保っている<sup>4</sup>と考えることができるだろうか。

境界維持というのは「システムとしての基本条件」である。

「あなたがあなたの同一性を保つためにすることは何ですか？」たとえば一人で行うことには日記をつけることがある。今日こんな発言をしてしまったけれど、普段の私だったらこんなことは言わなかった…などと反省することで、普段の自分を再構成しつつ、その発言を位置づけることができる。あるいは他者とお互いに観察・言及しあうことでも可能だろう。「あなたって子どもっぽい」と言われることが不本意であれば、子どもっぽいと

<sup>2</sup> たとえば今回と前回の着席の様子（＝行為）を観察すると、様子が違うかもしれない。その二つを比較してみると命令の効果の違い（＝教室という社会に働く力）を説明できるかもしれない。

<sup>3</sup> これは非常に実証主義的な印象を受ける。というのは、自然科学のメタファーで社会科学を考える、法則から存在を示す、という辺りに、だからどういけないというわけではないのだが、社会科学ってそんなものなのかな、と思ってしまう。この「なんとなく」はもちろん科学的でないのだけれど……。

<sup>4</sup> うまく表現できないのですが、内部を保つということは内部と外部の境界を保つということで、結局これは世界の分け方とでもいうものを保つことになるのではないかと思います。

言われた行動を変えるなど。つまり自己観察と補正によって自己同一性（恒常性<sup>5</sup>）を保っている。

その同一性の内部、つまり自分を構成するものが内ということができらるだろう。そこに変化の原因があれば内生説で、そうでなければ外生説だろう。

#### 葛藤理論：内生説

葛藤理論は「社会とは定義的に矛盾・対立をその内にはらんでいる」とする。そうであるならば、社会が変化していくことは当然のことである。

#### 機能主義<sup>6</sup>：外生説

機能主義は「変化は社会の外部からもたらされる」とする外生説をとる。繰り返すが、これが結論だと思う。

授業では 2 つの機能理論と、それに基づく機能主義論争（機能主義内部での論争）をパラドクスを例に取りながら扱った。

#### [用語説明]

##### 2 つの機能理論

単機能要件モデル：機能要件が一つであるとする社会のモデル

複機能要件モデル：機能要件が複数あるとする社会のモデル

< 機能要件：社会が理想として目指すもの、社会が成立しているための要件

代表的な複機能要件モデル：T. パーソンズの 4 機能要件説

指向性の内部/外部×手段的 i/目的 c の 2 次元 4 分類。

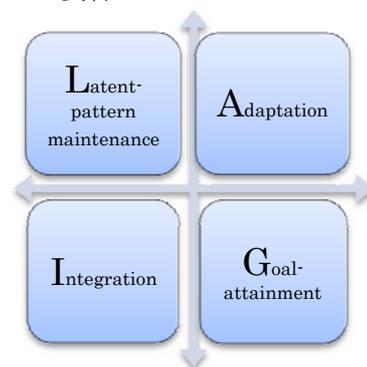
A 外×i 外部に適応すること

G 外×c 望ましさの要件を充足すること

I 内×c 内部が統合されていること、恒常性

L 内×i 個(社会の成員)は社会の規範を内在化している

観点が異なるので、それぞれの機能要件が相矛盾することもある。



\* 複機能要件がイメージとして、個人における機能要件の例に落として考えた。

例えば今私はすごく眠りたい。頭痛いし本当に寝ちやいたい【生理的欲求】。

<sup>5</sup> あるいは生物の個としてのシステムは「非平衡開放系」、「散逸構造」と呼ばれる。たとえば石がそれ自体で完結して恒常性を保っているのとは異なり、生物というのは単独では完結しない。常に外界と物質のやり取りを行うことを含めて恒常性を保っている（水や栄養の取り込みと排泄物としての排出、酸素の吸入と二酸化炭素の排出など）。境界維持というのは、「外界の変化と独立/連関して恒常性を保つこと」のことだと思う。境界維持はシステムがあるときに同時に必然的に成り立っている。

<sup>6</sup> 機能主義での社会ってどんなものだったかな？ →「相互依存的な交換関係があり、それが様々な役割を支える」「shared value が核」

でもこの授業レポートを提出しなきゃいけない。あと発表も迫っているし……【目的達成】。今日の夜は学科の友人に飲み会に誘われてて、今まで一回しか行ってないし何回かすっぽかしてる(……) 私としてはそろそろ行かなきゃって思ってる【適応】。どこまで本当かは問わないでください。これらをすべて上手に満たして初めて「私」というものがあるのだけれど、でも同時に満たすことはとても難しい。観点が違って私という場は一つしかないから、互いに干渉し合ってしまうんですね。

#### [機能主義論争の中身]

##### 単機能要件モデル

機能要件を一つで表そうとすると、抽象度が高すぎる ⇔ 説明の価値がない<sup>7</sup>。

##### 複機能要件モデル

したがって説明の価値を担保するために、複機能要件モデルを採用しようと思う。

⇔ しかし、複機能要件モデルはモデルとして機能しない。 → どういうこと??

ここで重要なのが、先に述べた「観点が異なるので、それぞれの機能要件が相矛盾することもある」ということ。矛盾して何が問題かということ、行動の指針が立たなくなり、何も決定できない状況に陥る。

e.g.)3人の3つの対象への選好のパラドクス

[A,B,Cの3人がそれぞれa,b,cへの好みに順位をつける。どれを取るかをそれで決めたいと思う。]

好みが以下になった場合、単純な多数決は機能しない。

A:  $a > b > c$

B:  $b > c > a$

C:  $c > a > b$

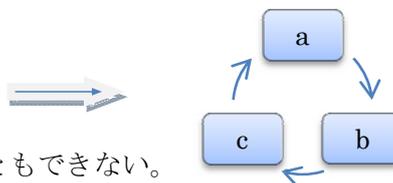
そこで、2つのものの比較( $x > y$ の決定)によって優位を決めたいと思うが……

$a > b$ が2回、 $a < b$ が1回 →  $a > b$

$b > c$ が2回、 $b < c$ が1回 →  $b > c$

$c > a$ が2回、 $c < a$ が1回 →  $c > a$

循環構造になってしまって、結局どれを選ぶこともできない。



複機能要件を立てるということは、以上のような決定不能な状況を想定するということ。決定不能=システムの同一性を保証しない。つまり、境界維持の不能。

境界維持の不能をはじめから含意したモデルは、システムのモデルではない。システ

<sup>7</sup> 平穏に生きたい。というのはとても真理に近い要件だけれど、では平穏とはどういうことなのかを全く説明しない。例えば衣食住の安定、他者に傷つけられる可能性の低さ、などいろいろ下部要素が考えられる。

ムが成立しているときには境界維持はできているはずだから。

### 改善策

この問題点を解決して現実に即す(記述的になる)ために、機能理論は 2 段構え的理論を構成する。

モデルは単機能要件モデル<sup>8</sup>とする (ことで境界を維持)。  
ただし、環境に影響されて、その時々望ましいものは設定される(=対応する)<sup>9</sup>

つまり、変化が外からもたらされる(外部環境に対応して変化する)。

### 変化のしかた/境界のはしり方

このようにどこから変化が生じるか、つまり境界がどのようにはしるかを観察することは社会の性質の記述になる。

したがってここでも機能主義-葛藤理論の説明力の優位の論争が出てくる。

ポイントは、「誰もが平等に弱者/強者になりうるわけではない」ということ。どこでも弱者になりやすい者は存在する。

## 【4.権力と独裁】

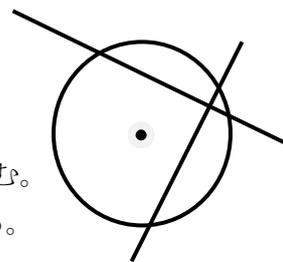
権力とは何だろうか。Weber の定義する権力と独裁によって規定される権力を例に、権力について考察した。

強者になりやすい者 円の中心としての権力

権力=中心の点。これはいったい誰、どんな人物か？

→ ミルズでは 'power elite' として規定。人脈、情報を囲い込む。

例えばアメリカの有力者が、ローズ奨学金でつながっている。



権力とは何か？

Weber の定義 人が人を意のままにする力

⇔ しかし現実社会では、この定義では説明できないものがある。むしろ多い。

e.g.) 『ふつう』というのは、majority が持つ権威であり、それを持ち出すことで行使

<sup>8</sup> 抽象度が高すぎて説明価値のないモデルでした。

<sup>9</sup> 例えば先のひどい筆者私の例でいくと、現在のところレポート提出が最優先。でも昨日の状況だと、締切が今日で頭痛が今より酷かったから、寝ることが優先だった。とか。たとえ話です。そして飲み会に行かないのが半年も続けばみんな「あいつは行かない」と思って誘ってくれなくなるだろうから行かないし、今程度ならまだ行かないでもいいと思う。でもこれが 1 ヶ月後とかだと、そろそろ行かなきゃ本当に誘ってもらえなくなるっていうぎりぎりの時期だから、何とかして行かなきゃと思う。たぶん。それが環境に影響されてその時々望ましい行動が設定されるということだろう。

される権力がある。

「ふつうはこうするもの」と言ったときには、発話者が受け手を意のままにしていると言える。つまり権力を行使しているのは発話者と言える。しかしこの権力の源（権威）は発話者にはない。持っているのは不特定の「みんな」である。

また、誰に言われるでもなく自分の行動を「みんな」へ同調させる時、これを権力が働いていると言うだろう。これは誰の意のままになったと言うだろうか？

つまり、中心に権力者を置かなくとも、社会を分ける線分がはしった瞬間に権力は生じているとは言えないだろうか。

### 独裁 monarchy

Dahl の定義 polyarchy : 独裁としての民主主義（民主主義が「よいもの」になったのは最近のこと<sup>10</sup>）

### Arrow の一般不可能性定理 general possibility theorem

: 個人の投票を集計するときに生じるパラドクス

3人以上の人が互いに独立に選好を決定するとき、社会的に許される（受容できる）＝合理的な選択の要件は4つ。すなわち、1 自由決定、2 パレート原説（全員一致ならばそれに決定する）、3 独立性、4 非独裁

### （Arrow の）非独裁の定義

: 任意の選択プロファイルについて、「もし個人  $i$  の選好が  $x > y$  ならば全体の選択が  $x > y$  となる」ような個人  $i$  が存在しない。

→ 線を自由に引けるような人がいれば独裁となる。

現実的な権力に即して、独裁的な権力への疑問

権力を、それを行使する人物（権力者）とセットで考える（Weber の定義）ということは、線を自由に引ける人物がいる独裁モデルで考えることである。

しかし、権力やその権力が行使される場としての社会は、独裁モデルでしか説明できないだろうか？

逆に、（円の中心の点ではなく）権力が社会の性質として表れるならば、どのように線は引かれるだろうか？

---

<sup>10</sup> アリストテレスがよい政治の基準としたのは「市民全体の利益が追求されること」で、その形式としては王政でも寡頭制でも民主政治でもよく、最善は『富裕層と極貧層の間の「中間層」が支配する体制』。(孫引きで申し訳ありません。山脇直司,2004,公共哲学とは何か,筑摩書房 p.p.56-57)

【感想】

講義中はできる限りノートテイクであろうと講義に即してノートを取りそのまま理解したつもりだったのですが、結局見直すとどういう理論でそうなったのかわからないところが多々ありました。とくに 3,4 は顕著で、筆者の中で再構成しています。

問題点は多々あると思いますが、自覚している大きなものは、1.筆者自身が葛藤理論・機能主義の優位の話をきちんと消化していないのでこの部分が非常に不十分であること。  
2.Dahl の定義と Arrow の一般不確定性定理が講義の中でどのような位置付けであったか理解できていないことです。

いろいろご指摘/補足をくださいますようお願いいたします。